

会長就任のご挨拶

（私と一游会・今後の展望）

51回生 高田 明夫

2019年11月30日、「90周年を祝う会」の臨時総会にて、急逝した青木会長の後任として、一游会会長に選ばれました。青木前会長は、前号の一游誌でもご報告の通り、2019年5月20日に江戸川病院にて亡くなり、その後約6か月の会長不在がありました。この間、一游会総会、至大荘・水泳部支援、OB戦の諸行事の遂行をしながら、ほかの会長適任者の有無の確認や、新たな副会長、監査の任命を行い、新体制を発足させることができました。

新体制では、現在の63回生（山口さん、南川さん、橋田さん、土屋さん）の役割を継続しながら、副会長として54回生の石田さん、56回生の深川さん、57回生の臼田さんを、ご意見番の監査に51回生の藤井さんを迎える布陣としました。現役と一游会の橋渡し役として、助手活動は79回生長谷川さん、水泳部は84回生飯島さんにそれぞれ協力いただいています。

今回は、自己紹介をかねて、自分と一游会とのかかわりを

振り返りつつ、将来を展望したお話をさせていただきますので、ぜひご一読ください。

私は、1977年に都立九段高校に入学、水泳部に入部、1980年に卒業し、一浪を経て、北海道大学に入学し、1985年に第一勧業銀行（現みずほ銀行）に入行し、札幌支店の3年間、1994～5年にハワイにある日米経営科学研究所に出向を挟み、銀行のシステム開発に従事してきました。2014年にみずほ銀行を退職し、日本ハーデスという宝くじ販売会社に勤めた後、2017年からインテレット（株）の代表取締役として、金融機関、事業会社向けのシステム開発会社の経営をしています。

一游会とのかかわりは、1977年に九段高校水泳部入部し、一游誌に掲載される校内10傑に掲載を目標に練習に励みました。一游誌には16校戦、他校との対抗戦の記録も掲載されており、関東大会やインターハイとはレベルは異なるものの、他校の選手と16校の前哨戦（またはリベンジ）で顔の良く見える相手と凌ぎを削っている感があり、対抗戦が部活の楽しみの一つでもありました。

高校2年の時、水泳部部長となり、一游誌に寄稿を求められ、なかなか言葉にできない思いをどう伝えようかと、さんざん悩んだことを思い出します。（今思えば、この言葉になりにくいことをあえて書くことで、一游誌が成り立ち、それ

を何十年にもわたって継続していることに、先輩方の慧眼です。

現役を卒業し、一游会会員になると、その当時はコーチ・助手になることが義務づけられていると同時に、「大人の仲間入り」といった感があり、ついこの間まで、OBの批判をしていた先輩がなだめ役に回るような、一線が引かれるのも一游会という存在でした。

大学生になると、一游会の会費の集金をしました。大学が札幌だったため、東京の一游会幹事から札幌在住の会員の集金を依頼しました。一游会の30代の社会の第一線で活躍されている先輩方(33回生一倉さん、35回生山田さん、39回生岡田さん、41回生丸山(旧制高橋))と札幌一游会の集まりを企画し、新聞社、小学校、検察庁、石油会社と、様々な仕事に触れることができたのは、大きな収穫でした。その後の就職、社会に出てからのスタンス形成に大きく役立ちました。

就職してからは、54回生高橋さんが亭長の至大荘にお手伝いに行った1988年以降は、仕事、子供の世話などで、しばらく一游会にはご無沙汰していました。しかし、50回生脇坂さんの逝去をきっかけに、至大荘に毎年行くようになりしました。脇坂さんは養護学校教員として、教え子を至大荘の一般開放の時に引率していました。脇坂さんの葬儀の

際、教え子の父母から、子供たちと至大荘に行きたいという話があがり、脇坂さんの代わりに引率をしようと、50回生、51回生の有志で脇坂さんの遺志を継ぐことにしました。引率の会の名前は、「かつおの会」とよび(脇坂さんのお名前「勝男」に因んで命名されました)、脇坂さんが世を去ってから25年以上たちますが、今も続いており、50・51回生以外の一游会会員も参加するようになりました。

2012年に26回生森さんから青木さんに一游会会長にバトンが渡された際に、副会長を拝命しました。青木会長の旗振りで、一游会を魅力のあるものにしようと、7年間でいろいろ取り組みを行いました。(2012年に前年度東日本大震災の影響で中止になった前年度の中4年生と同年の4年生の2期分の至大荘を実施することになり、それ以来至大荘助手のお手伝いも復活しました。)

一游会幹事として、取り組んだ新機軸として、①マスターズ大会に一游会で参加、一游会の仲間と湘南OWSやその他の大会に参加、②85周年、90周年行事の企画実施、③OB戦を参加しやすいように対抗戦方式から記録会方式(記録証を発行)とした、などがあります。

かれこれ43年に渡り、一游会に携わり、かけがえのない貴重な人とのつながり、感謝してもしきれない人生経験を

しています。競泳・遠泳を通じた肉体形成、ひいては人生のスタンスを形成してきた一游会に、今後はその恩返しを取り組めればと思っています。

一游会の会長としての今後の抱負、一游会で行いたいことをお伝えしたいと思います。

① 一游会を魅力あるものにし、将来にわたり永続させる。

今までの一游会が私に与えた影響に感謝し、ほかの一游会会員の方々にもそんな体験を少しでも、あるいは一游会に関係したことで、豊かな人生を感じられるように、未来にも一游会が続いていけるような運営をしていきたいと思っています。

② 会員の親睦のアイデアを形にし、世代を超えた交流を活発にする。

一游会を存続させるために、名簿の管理、一游誌の発行、会費の徴収、会計、総会、OB戦、周年行事の開催、現役支援のための学校などとの意思疎通などの多数の事務があります。これだけのことを少人数でこなして運営しておりますが、デジタル化の取り組みや時代にあった運営の工夫も必要です。従来のやり方にこだわらずに、未来志向の見直しを進めたいと思います。そのためには、若手のメンバーに

も運営協力をお願いし、時代の流れに沿った運営をしていきたいと思っています。

一游会の副会長に就任をしてから気づいたのは、若手（20―40代）の方々に才能が豊かな方で、いろいろなアイデアをお持ちの方が多く、これが一游会の強みであることがわかりました。彼らのアイデアを傾聴し、一游会のあらたな活動に取り組み、組織を活性化できればと思っています。

③ 学校組織の支援、菊友会、法人九段との連携を密にし、水泳部OB会にとどまらない九段応援団になる。

50才を過ぎてから至大荘に参加し、校長先生・水泳部の先生、法人九段（至大荘の施設運営や助手支援）の幹部方々と意見交換をする機会が増えました。至大荘を取り巻く環境も、法人九段の公益への貢献義務、守谷の住人たちの高齢化、水泳部の先生方のローテーションの短期化など、大きく変化しています。一游会の大学生で助手になる人が少ないのも以前とは異なる環境の一つです。同窓会の組織活動として、一游会が九段中等の応援団になることを期待されており、その期待に応えるための知恵出しや人材の輩出を課題の一つにしたいと思います。

亡くなった青木さんは、一游会会長、法人九段の

事務局長、菊友会理事を兼務され、残りの人生をこの活動に捧げる意思をお持ちでした。何が良いのか手探りになりますが、青木さんの遺志をつなげたいと思います。

以上のスタンスで、会長職を遂行していきたいと思っています。

会の運営には皆様のご理解とご協力が必要です。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

以上



河童の便り

九段と私

一島 英治 (23回生)

私は昭和一桁生まれの最後の世代です。昭和二一年に旧制の都立九段中学校に入学し、学制改革によりできた都立九段高等学校を昭和二七年に卒業しました。いわば、昭和の昔の都立中高一貫校の最後の卒業生です。一游会的には、二三回(高四回)卒業生です。

九段の生徒時代というのは、我が国の「敗戦の次の年からの激動の六年間」でした。東京をふくむ多くの全国の都市は空襲による「焼け野が原から復興へ」という時代で、作家の目からみると『日本の黒い霧』の時代に相当しました。

九段といえば、水泳部、至大荘、盡生園、そして皇居めぐりのマラソンなどがすぐに思い出されます。同級生には、いずれも故人となった、中学時代の厚川昌男(紋章上絵師で作家・泡坂妻夫、泉鏡花賞、直木賞ほか受賞)さんや、高校時代の吉田よし子(旧姓、大西)さんがいました。厚川さんは、文筆のみならず、奇術の大家としても知られていました。吉田さんの著書には、『マメな豆の話 世界の豆文化をたずね

て』(平凡社新書、二〇〇〇)があります。

二十八歳、十二指腸潰瘍穿孔による急性腹膜炎で緊急入院した際、勤務先(キッコーマン(株) 中央研究所)の野田病院外科部長・辻寿一先生(旧制・第一東京市立中学校の先輩(七回生))が当直の夜で、翌日早朝から先生の執刀により九死に一生をえました。

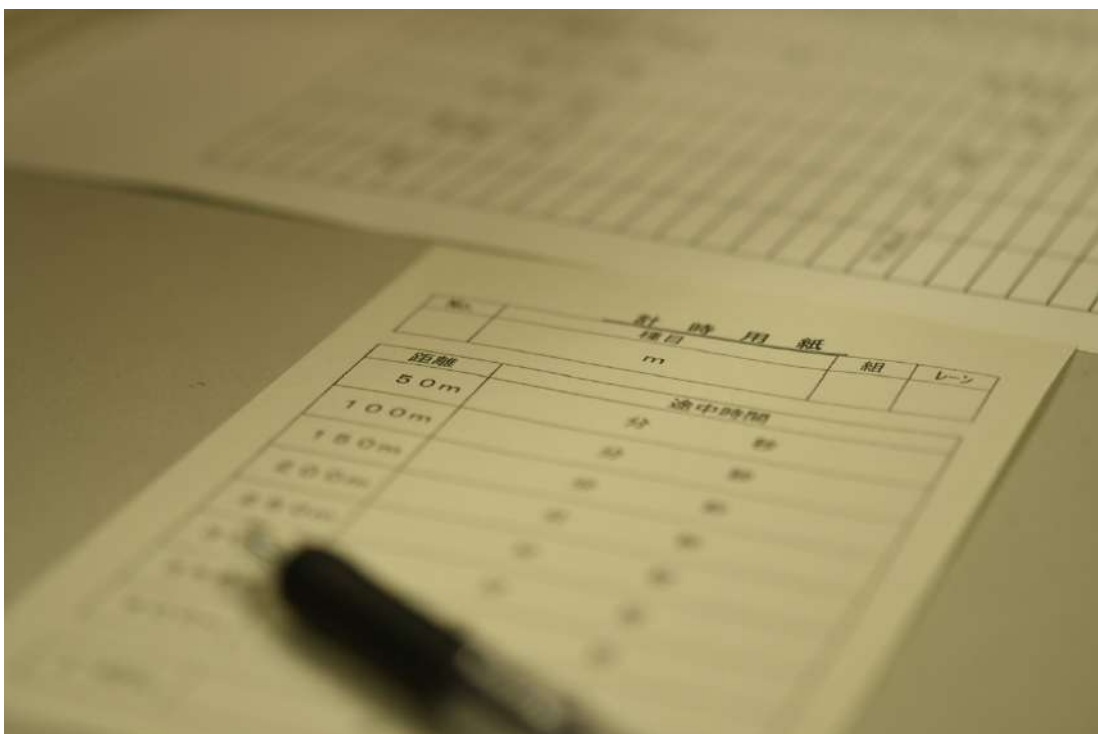
二〇二〇年は、三月一日にWHO(世界保健機関)が「パンデミック(世界的大流行)」と特徴つけた「新型コロナウイルス」が全世界を襲っています。

近況。昨今は水泳の生活とは程遠く、研究を考える生活で、研究者むけの本^(注1) つくりです。別に、巻頭随想「現代酵素学を支えるコウジキン」^(注2) があります。

(注1) ICHISHIMA, Ei-ji. MODERN ENZYMOLOGY FOR THE NATIONAL MICROORGANISMS OF JAPAN. Newcastl
e.. Cambridge Scholars
Publishing.

(注2) 一島英治、「日本醸造協会誌」、一一五巻、八号、四四三頁、二〇二〇年。

(東北大学名誉教授、東京農工大学名誉教授)



この異常な夏に、去っていった人々を想いながら

森 彰英 (26回生)

長い間生きてきたがこんな夏に出会ったことはない。新型コロナウイルスの汚染拡大で生活すべてが大変化している。先日届いた一游会からの便りでは至大荘行事も水泳部の対外試合もOB戦もすべて中止だという。現役ならびに若い先輩諸氏の戸惑い、落胆は察するに余りある。昨夏どころか今年の2月頃まではこんな事態を誰が予想しただろうか。ところでそんな異常事態が来る前に僕は一游会の人たちとの果たすべき出合いを心置きなく済ませてしまったことに気がつく。一年足らずの間に会うべき人に会い、別れを惜しむ人たちにはそれぞれの機会を得たことが今となっては不思議に感じられる。

昨年の夏から秋にかけて自分史の一コマとして刻み込まれた何人かとお別れをした。まず一游会会長の任期中に急ぎ足で立ち去ってしまった青木俊行(45回)。そのショックと哀悼の念は「二游」の前号の特集で各々が記した通りである。その後を追うようにして宮下元治郎(35回)、荒木勤(30回)と愛すべきキャラクターを失った。荒木の追悼会は9月下旬の日曜日に彼の生まれ育った大森のホテルで

行われたが、親族、職場、大学、高校あるいは趣味の仲間など彼の多彩な生き方を反映して盛会だった。一游会の仲間たちは「水泳部数え唄」を合唱して彼を見送った。それから3ヵ月ほどして当日のスナップを収録したアルバムが送られてきた。ハンディなサイズで写真のアンクル、レイアウトなど実に見事な出来であった。荒木の姪御さんが中心となつて愛する伯父さんに捧げた労作だそうだが、死して後までそんなサプライズの種を蒔いておいた荒木の真骨頂を見せられた気がした。

11月の最終土曜日は素晴らしい秋晴れだった。一游会90周年記念パーティの会場に行くために降りた飯田橋駅から眺めた外堀の景色が美しく目に焼き付いた。会場に入つて高橋正明(29回)の姿が目に入った時、僕は懐かしく嬉しかった。半年ほど前に彼はいくつもの病気を併発して自宅で介護を受ける身になっている、このまま会える機会がないかも知れないと僕に知らせて来た。しかし数日前に担当医や介護者の許可を得たうえで出席可能と知らせて来たのである。夫人とお嬢さんに付き添われた彼は闘病生活の辛さなど少しも感じさせずに昔と同じく駄じゃれを連発していた。実弟の高橋正典(32回)・由美子(33回)夫妻も寄り添い、それを囲むようにして昔の仲間たちが集まっている構図はさながら観海亭や合宿の場面再現であった。

長い年月を共に過ごした者だけが体験できる至福の光景と言うべきだろう。

会場を埋め尽くした多くの人々と僕は断片的に言葉を交わした。フラツシユ的に様々な出会いがあった。今となってそれを採録するのは困難なので一つの出会いだけをここに記しておく。小林明澄(78回)にお久しぶりですと声を掛けられて僕は十数年の壁を一気に乗り越えた。僕が一游会の会長をしていた頃、彼女は水泳部のトップスイマーだった。女子の歴代20傑ではいまなお自由形種目の最上位に名を残している。水の女王のような女の子がある時、年末の忘年会で同席した時に、いわゆるリケジョになっていた。彼女にゆれば、もう存分に泳ぎつくしたから何か別のことがしたくなつて大学は理系に進み、将来は建築の仕事をしたいと語った。僕は頭の中の知識を総動員して何人かの建築家の名前を挙げ、彼女が進むべき方向について話を合わせた。それから10数年、彼女は大学院にも進み、今では本当に建築家として活躍している。そのうえ嬉しいことを言ってくれた。「先輩が昨年、一游に書いた文章面白かったですね。都市論として共感しました」。至大荘のある上総興津の町での体験を記して、在りし日の幻を追った駄文である。それをまともに読んでくれたのか、お世辞とは知りながらも、私は彼女の成長が本当に嬉しかった。

一つの出会いだけを取り上げたが2時間余りの間に次から次へと同じ様な出会いが続いた。僕はあの頃、一游会の会長を引き受けて本当によかったと思った。自分には特に責任感があつた訳ではない。ただ育ち盛り、伸び盛りの人たちの傍にるのが楽しく、何か元気を貰ったような気がしていたのである。そんな20歳前後の人々がいま各分野のプロフェッショナルとして僕の目の前にいる。あらためてそんな感慨にふける暇もなく閉会の時間が近づき、僕はこの日の出席者で最年長として挨拶することになった。

困ったことである。最年長ということは人生の残り時間が最短ということか。確か80周年記念の時に最年長として挨拶したのは世界的な動物写真家の田中光常さん（14回）であつたが、田中さんはそれから数年後に世を去られた。しかし思い直せば、それだけ長く一游会を通じてプールや海や幅広い年齢の仲間たちと楽しく味のある付き合いができたということか。それに感謝して次の100周年に向けてよろしくと次の世代に呼びかけて、挨拶を締め括った。

明けて令和2年1月半ば、飯田橋の居酒屋で一游会若年寄会の新年会が開催された。この日はいつものメンバーに加えて、一游会の現役実行メンバーや至大荘助手の代表なども加えた拡大版で盛会であつた。この会は30年余りに一游会で集まる仲間たちで、自分たちもう若くはないが

年寄りではないという変な自己認識から生れたものである。席上配布された「一游会若年寄会变遷史」はずっと世話役を務めてくれた赤司久雄（34回）の労作で、いっどこで、どんな趣旨で集まったかが年表風に記述されていた。こんなに細かくファクトを再現できるのか、その緻密で高度な記録性に驚いた。店の名前や参加者、ゲストの人名からあの日あの時が浮かんでくる。また逝去者リストからは先立った者への想いが伝わり、追悼録というよりも、むしろ生き続けている者への励ましのメッセージともなったように思えた。眺めていて死者が甦って次々とドラマが展開されてくるように気がしてきた。（以下・故人のプライバシーを考慮して仮名として事実を若干フィクション化していることをお断りしておく）最初に先立っていったHは優秀なビジネスマンだったが、出向先での人間関係に悩んでいるうちにギャンブルに傾斜して生活が破綻、清算するために自死した。それを聞いた同期の女性Sは「あなたほどの人だったら必ず再起できたのに。なぜ踏みとどまってくれなかったのに」と涙を流した。しかし、そのSも数年後に難病で世を去った。かつて仲間内でマドンナ視された容色が衰えているのを見せたくないのを見舞いを峻拒していたとも聞いた。

たまたま恒例の忘年会がSの追悼会を兼ねた時に実に卓抜な告別スピーチをした同性のKもそれから数年後にがん

を病んで世を去った。彼女がいなくなってから僕たちは死に至るまでの約半年間の行動を辿り直して、その精神の強靱さ、周囲への配慮の深さに心を打たれた。Kは自分の病気が回復不能だと自覚してから、仲間内の集まりにはすべて顔を出したうえ、会うべき人とは個別に機会を設けて、そつとお別れを言つて、死に向かつていったのである。

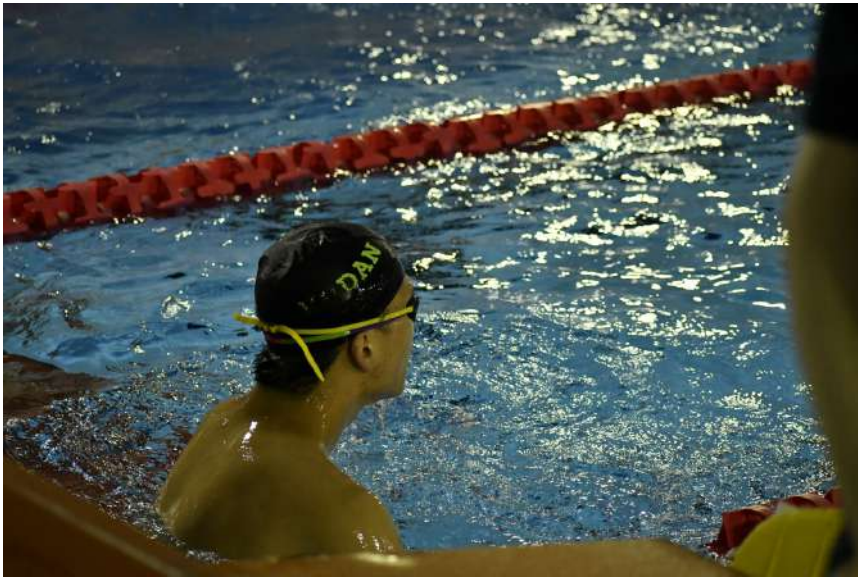
またMは技術者として一流で人格も高潔温和で誰からも慕われたが、家庭的には不幸だった。最初の結婚に失敗して、二度目の家庭もあまりうまくいっていないとの噂を聞いた。一頃は家に帰らずに単身で暮らしていたことが病気の発見を遅らせたという噂も聞いた。厳冬の時期に行われた通夜には彼の人の柄を慕って一游会関係、職場関係から驚くほど多くの人が集まって、何だか盛り上がってしまい、賑やかな通夜酒になったことを記憶している。Nは現役の頃から世話を焼かせる存在だった。複雑な家庭環境のためか、寂しがり屋、甘えん坊で年上の者から叱られるのをむしろ喜ぶようなところがあった。そのNは最初の結婚に失敗、二度目の結婚で選んだ伴侶は、才能は明らかに彼を上回るキャリアウーマンで、彼女は初婚だった。それ以来、われわれの集まりにも必ず二人連れで現れた。いつか僕が彼女に向い「こんなやつと一緒にならなかったら、あなたは今頃ニューヨークか香港にオフィスを持って活躍していたでしょうに」と

言つたところ、「でもこうして皆さんとお付き合ってきたから幸せ」と喜ばせる答えが返って来た。しかし、そんな幸せは長続きしなかった。Nはバブルの余波に乗って事業を拡大したが、それが裏目に出て破綻、ビジネスパートナーに巻き込まれた連れ合いも本業に痛手をこうむった。そんなところから結婚生活は破綻、心を病んで彼女はNのもとを去った。ついに独居生活に入ったNは窮迫の果てに孤独死した。最後を看取することはできなかったが、死に至るまでの経過を辿り、危うく無縁仏になりそうだったNをあらためて葬り、若年寄会の席で追悼する機会を作つたのは散々彼に手を焼かされたかつての仲間たちであった。

僕の頭の中ではこのように次から次へと死者をめぐるドラマが展開されたのだが、ここに登場させた人に限らず、他の人々についてもそれぞれ別のドラマが語れるはずである。僕はそこで気がついた。人間は生きていれば必ずいつかは死を迎えるが、その死に方に様々なのである。そう言えば何年前か前に文学や哲学の領域で「メモント・モリ(死を想う)」という表現が使われた。今度の集まりは僕にあらためて「メモント・モリ」の機会を与えてくれたのである。

さてとりとめなく駄文を弄してきたが、8月中旬現在、コロナウイルス旋風はいまだ治まっていない。しかし、いつかは終息し、あの混乱が懐かしい昔語りとなる日が必ず来る

だろう。その日まで僕が生を長らえているかどうかは分からない。しかし、現時点でこんなふうにお互いの「メモメント・モリ」を存分に語れることは幸せだと心から思う。一游会の発展を心から祈願して筆を置く。



一倉重雄（33回生）

コロナ禍で運動は散歩程度ですが、食生活を見直し体重を5kg減らすなど健康な日々を過ごしています。

5年前に右眼の手術をしました。現在左眼の視野の歪みを軽減するための治療（硝子体内注射）中です。

梅雨時の屋外プール

渡辺照正（35回生・高16生）

七月も下旬に入った・

新暦の七夕は梅雨の最中だから、天の川は縁遠く、願いを書いた短冊も笹の葉とともに雨に濡れそぼる。

七月一日は石神井プールが開く。池と緑の公園の一角を占め、木立に囲まれた、五十メートル、9コースのプール。プールサイドにも余裕がある。自然の中にあって係りの人達も大らかだ。水面や水の中にも、風で飛ばされた小枝や木の葉が落ち、時折手や足に触れる。ここに毎日通う。

西側の1コースは歩行用、隣の2、3コースまとめて50メートル続泳用、残りの6コースが自由の世界だ。

西日本や中部ほどの豪雨はないが、梅雨らしい日々が続

く。コロナ感染の警戒が人々にも施設にも浸透して、この時季、平日のプールはひっそりとしている。雨模様の日だと、ポツンと私一人が浮かんでいるという情景が少なくない。十五〜二十往復を、水の中や周囲の木々、曇天の雲の形などを見ながら、一定のリズムでひたすら手足を動かし続ける。傍らの水の中に子供たちの姿が見える。たいていは低学年の女子小学生である。元氣、澆刺としている。ふと、人恋しさが紛れることに気付くことがある。自由の世界を共有しているという懐かしさも沸き起こる。梅雨時の屋外プールは、ひっそりと自由を満喫できるのだ。

中尾晴夫 （高校20回生）

早いもので本年古希を迎えました。3ヶ月間閉鎖されていたプールにも6月より足を運び始めており、自粛していた和船操船活動も再開され、何とか元氣に過ごしております。新体制を迎えた一游会の更なるご発展と会員の皆様のご健勝を祈念しております。

梅本高士 （40回生）

相変わらず、元氣でまだ働いています。老害といわれないように、おとなしくしようと思うのですが、黙っていられない性分です。コロナの時代、大きな変化がありますが、しなやかに、したたかにやっています。

原田忠禮 （40回生）

現在菊友会の理事長を務めています。菊友会の理事になって早9年目となりました。今年はCovid19の影響で菊友会の主な行事もすべて中止となりました。一游会も同様で対応に苦勞しているご様子を高田会長からお聞きしました。

昨年は菊友会の行事に一游会から高田会長はじめ多くの方が初参加をしてくれました。感謝しています。

一游会の優秀な方が菊友会をもリードしてくれることを願っています。

運動不足の体を引きづって何とかコロナから逃れていま

す。コロナの早期終息と、会員の皆様の安寧を祈念致しています。

高橋 文平 (高35回・中54回)

元気です。オリパラ組織委で水泳会場の建築担当です。辰巳の隣に居ます。

コロナで週一のドラドラ泳ぎもしばらく行けてません。来年の大会に向けて頑張ります。

深川英樹 (高36回・55回生)

昨年の一游会90周年式典より副会長を務めさせていただきました。だいています。

50代も半ばとなりますが、一游会の発展に微力ながら貢献出来ればと思います。

よろしくお願いいたします。

白田光志 (高57回生)

皆様お元気ですか？ コロナ禍で今年はお会いする機会が激減してしまいました。4月から長女夫婦との同居が始まり二人の男の子の孫の成長を日々楽しんでます。東北の震災の年から通い始めたスポーツクラブも今年で10年目、週に5000mをノルマに決めて泳いでいます。又、お会いできる日を楽しみにしています。ご健康にお氣をつけてお過ごしください。

山口晃平 (63回生)

コロナの影響で、一時期はフィットネスクラブも閉館してしまい、運動不足の日々を送っています。

前部長より

感謝

部長 六年 山来 真名美

中等十二回生六名、無事に引退しました。私が部長になってから痛いほど先輩方の存在のありがたみを感じ、この想いを後輩、そして先輩方に伝えるのが私の最後の役目だと思って十六校最終日を過ごしました。ちゃんと伝えられたかは不安が残りますが、沢山の方々に引退を見守っていただけたことが本当に幸せです。ありがとうございました。

部長は和泉田健太に引き継ぎました。十三回生四名の仲の良さを存分に発揮して、みんなを引っ張っていつてくれるはずです！これからの水泳部を宜しくお願い致します。私も胸張ってOGさんの仲間入りが出来る様に頑張ります！またお会いできる日を楽しみにしております！



前副部長より

コロナ禍の引退

副部長

六年

齋藤 さいとう

里佳 りか

六年間を振り返れば、顧問の先生が変わったり、新型コロナウイルス感染症であつたり、多くの分岐点がありました。そんな激動の学年、十二回生の一員として八月に引退をしました。インハイ予選はなくなり十六校までも学校開催となりましたが、むしろ私はこの引退を誇らしく思います。きっと、他の代には感じられなかったものを得られたからです。

高校三年生になると部活はもちろん、受験に向けた勉強で忙しくなっていました。今まで優先順位が圧倒的上位だった部活は徐々に自分の中で低くなり、半強制的なものになってしまふのではないかという不安もありました。そのような気概で取り組む中、コロナで部活は中止となり、口では残念というものの、正直安心する気持ちが大きかったです。都高校でベストを出さなければ、良い順位を取らなければ、そんな自身のプレッシャーからも解放されました。

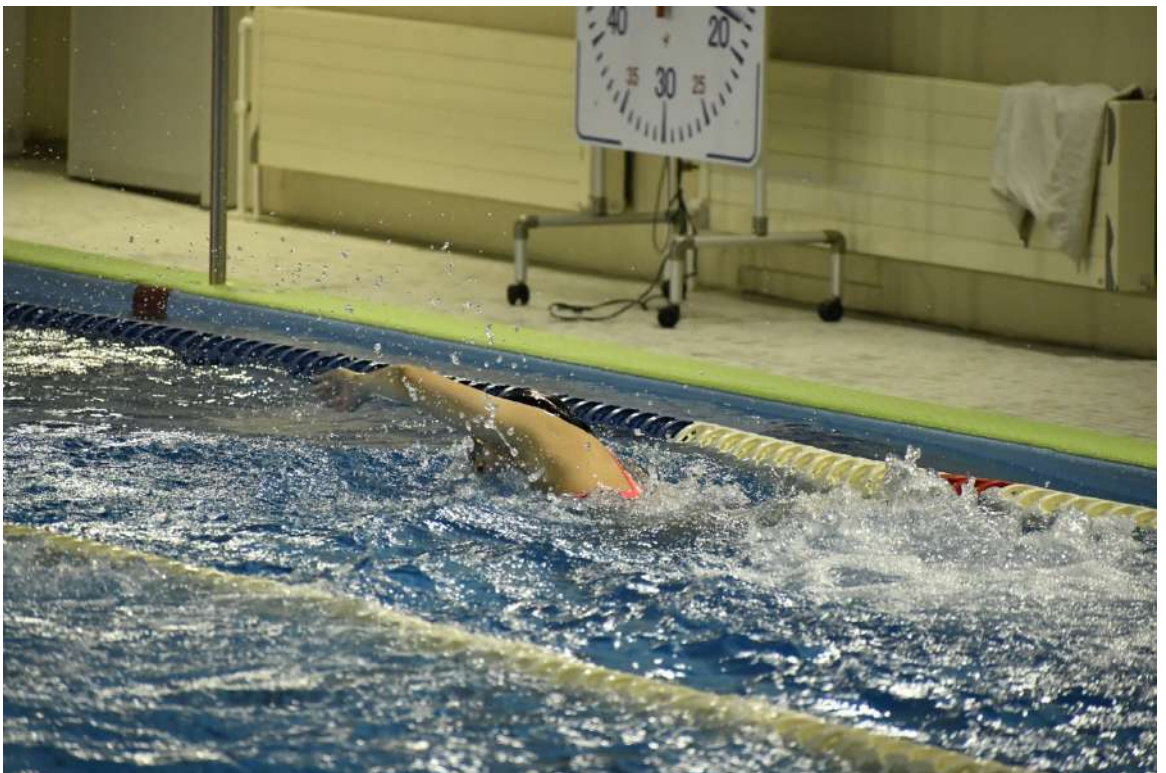
しかし、時間が経つにつれ、だんだんと部活のことを考えるようになりました。今まで当たり前にあつたものが無く

なり、虚無感がとにかく凄かったです。泳ぎたい、部活に行きたい、みんなに会いたい、率直にそう感じる事ができました。

部活に求めるものは一人一人異なると思います。全国を目指すための技術を求める選手もいれば、体力向上を求める選手もいます。私が求めるものも、また、練習環境や技術向上だと思っていましたが、このような経験を通してもっと深いものであつたと気づかされました。本当に求めているものは当たり前の「居場所」でした。授業が終わり嫌々ながら、地下の階段を降りると挨拶してくれる部員。向かい合つての体操。きつい練習。ミーティング。ロッカーでのバカ騒ぎ。どれもかけがえない私の居場所でした。これらの時間を感じることができたのは部活から離れた時間があつたからだと思っています。離れた時間が部活への思いをより熱くしました。この時間が無かつたとしたら十六校での一時的な高揚感と興奮だけで引退していたかもしれません。そう思うと私は非常にラッキーでした。部活への初心を取り戻し、部員・先生・コーチの大切さを再確認できたのです。そして、その思い出が全て詰まる九段のプールで引退を飾ることもできました。大人になっても、きつと忘れることのない引退であつたと思います。ここまで親身に部員の目線に立ち、時には厳しく、進むべき道のヒントを下さつたコ

イチや先生方、関係者の方々には本当に感謝しています。部員の頃は「うるせーなー」と思うこともありました。（何度も。）しかし、今だからこそ、引退したからこそ、込み上げてくる感謝の思いがありました。部活を引退したとしても、今までの経験を活力に、自身の目標に向けて邁進していきます。

現役生には人間的にも、技術的にも期待大の部員がたくさんいます。そして、このような苦しい状況の中で一人ひとりが今、自分にできることを考え、精一杯部活に向き合っています。九段水泳部はもともとと強く、大きくなっていくと感じました。一游会の皆様、今後ともご支援、ご声援のほど、よろしくお願い致します。



新部長より

後輩へ

新部長

五年

いずみだ 和泉田

けんた 健太

皆に部長と呼ばれるようになってから早くも一カ月が経ち、ようやく部を牽引する存在になったことへの自覚が芽生えました。威厳ある親しみやすい部長を目指したいと考えています。個性豊かな一年生を加えた全員が水泳を楽しめるような環境づくりを目指していくので是非一人一人、主体的に部活に取り組んでいきましょう。

もうひとつ皆に言っておきたいことがあって、それは、「挨拶しよう！」ってこと。ミーティングの後「お疲れ様でした。」を二回言うのは、プールに向けての感謝と顧問の先生やコーチに向けての感謝をそれぞれ区別したいから。日頃から感謝を伝えることってなかなか難しいと思うから、そこくらいバカでかい声で挨拶しよう。十六校で感じた人も多いと思うけど九段水泳部ってなかなか歴史があって卒業してから何十年も関わってくださる方がいて成り立っているところが大きいから、そういう人にも快い挨拶ができるといいね。

さて後々話すことにはなると思いますが、新体制となり、

新しいトレーニング方法なども導入していこうと思っています。六学年同時に活動する水泳部の特性を活かし、縦の繋がりを感じられるものになると思います。その際、先輩後輩関係なく意見や質問を交わし合ってトレーニングの質が自ずと上がっていくことを期待しています。

あと十一カ月くらい、来年の十六校まで失敗し続けながら何度も転んで何度もミスってそれでもまっすぐ水泳に取り組む僕を、それを全力で貶してくるであろう下川を、笑いのにしようとしてくる安井を、慰めつつ笑ってくる望月を、最高学年としての十三回生を見てください。そしてみんなも負けじと着いてきてください。



学生コーチ挨拶

九十回生 加藤 麗音^{かとう れおん}

一游会の皆様、日頃からご支援、ご声援ありがとうございます。
まず、学生コーチを務めております、九十回生の加藤麗音です。
現役時代はバタフライを得意種目としていました。今までに積み重ねた経験を生かして、現役生とコミュニケーションをとって泳法指導などを行っております。また、今年度は競技役員の資格を取得し、競技会の役員としても協力させて頂きます。

水泳部は、去年に引き続き、山口先生を中心に藤本先生、乙部先生、養護教諭の小巻先生の四名の顧問の先生のもと、活動しています。また、今年度も外部指導員として木原稟太郎コーチをお招きしており、主に後期課程の練習を見て頂いています。

今年は感染症による影響もあり、二月中期から六月までの約四ヶ月間にわたってほとんど活動が出来ない状態が続き、その期間の大会もすべて中止となってしまうしました。現役の部員にかかる負担や感じた不安は計り知れないと思います。七月からは、顧問の先生方のご尽力により少しずつ活動を再開し、泳力練習も出来る様になりました。部活に取り組めない期間が長く続いたため、筋肉が落ちてしま

うなど、誰もが万全の状態で練習を再開できないなか、気持ちを強く持って諦めずに練習に取り組む現役生の姿には、コーチとして見ていて強く心を打たれました。また、今年の十六校は各校での開催となり、八月十五日に本校のプールで記録会という形で行われました。選手たちはいつも泳いでいるプールで全力のレースをするという特殊な緊張感のなか、練習や調整に励んでいました。泳力練習が再開してから約一ヶ月と、非常に限られた時間で練習していたにもかかわらず、当日はとても熱いレースを見せてくれました。現役の中学生やOB・OGもレースに参加するなど、自校開催ならではの方法で大会の盛り上げに貢献しました。辰巳で開催する十六校と比べ、場の盛り上がりには欠けてしまうのではないかという懸念はありましたが、今年の十六校はそれに負けず劣らず、部全体でひとつの大会を作り上げることができました。

今回の十六校で中等十二回生は引退を迎え、十三回生が新たに部活を率いていくことになりました。十三回生は現在男子二人、女子二人の少人数ですが、学年の雰囲気はとても良く、十六校明けの最初の練習でも協力して部活作りに取り組む姿が見られました。現役生にとってはまだまだ厳しい状況下での活動が続きますが、限られた時間を有効に活

用し、また周りで支えてくださる方への感謝の気持ちを忘れずに部活動に打ち込んで欲しいと思います。



外部指導員 挨拶

きはら りんたろう
木原 稟太郎

一游会の皆様、外部コーチの木原稟太郎です。水泳部の指導にあたり、早くも五年の月日が過ぎました。

今年は新型コロナウイルスの蔓延、影響を受け、我々現代人がこれまでに経験したことのない生活や苦しい思いを強いられることになりました。皆様も大変な毎日をご過ごされているかと思います。

水泳部も当然ながら活動休止となり、現役生にとっては、泳ぐ楽しみ、練習する喜びを奪われ、シーズンの試合および十六校大会が中止になったこと、それによる目標がなくなった空虚感など大変辛い思いをする年になりました。

学校が六月から再開され、水泳部の活動の許可が下りたのが七月から。とても短い夏になりました。

自粛期間中に、私のほうから部員との距離感を保つため、また筋力低下を防ぐ目的で、筋力トレーニングの動画を作成して、部員で共有することも試みるなど、各部員も各々工夫しながら、自宅でトレーニングに励んでいたようです。

再開後は、制約されたルールの中、また体力や泳力が落ちてしまった中でのスタートでしたが、印象的だったのは、部員たちは水に飢え、練習できる喜びを感じながら泳ぎ始めたことです。部員たちと久しぶりに再会したことも嬉しかったのですが、みんなの笑顔を見てとても安心しました。

ひとつ、とても気掛かりだったのが高三生の様子と引退までどうするかということでした。幸い、部長の山来や齊藤が早々と最後までやると決意してくれましたが、本来なら十六校という大目標であり、ゴールがなくなってしまう中、どう締めくくるのか、それが出来るのか不安でした。

十六校については各学校で通信記録会を自主的に行うという形になり、これに顧問の山口先生が、実施を決断、高三生の引退の花道を作るようになりました。実施までに色々苦労もありましたが、山口先生はじめ顧問の先生方、OB OGの力添えもあり、当日は立派な十六校記録会が開催でき、想像以上の熱気で盛り上がりを見せ、部員たちも例年と変わらない熱い気持ちを持って泳いでくれました。

確に対抗戦にはなりませんでしたが、毎日泳いでいた自分たちのプールで、仲間に関われて応援されて全力で泳

ぐ十六校というのも、これはこれで良いものだと思います。

わずか一ヶ月半という短い夏の活動でしたが、毎回の練習はとても充実して、普段の五ヶ月分がギュッと凝縮された濃密な日々になりました。そして十六校記録会が実施できて、高三生にとっては、しっかりとゴールできたことはとても良かったです。

今年度の最上級生である中等十二回生は、私が九段に来て、中一から最後まで見させていただいた初めての生徒たちであり、思い入れや思い出もたくさんあります。

事情により、最上級生を二年務めることになり、苦労も多い中、部長の山来はじめ、立派に成長してくれました。そんな感傷に浸りながら、また今年のままならない活動期間を考え、最後のミーティングで涙腺が緩んだのは、ここだけの話にしておきます。

去年の十六校でTシャツの背中に刻んだ「感謝」の言葉。これは日頃から私も部員たちに言い続けてきた言葉でもあり、高三生がスローガンにしてきた言葉ですが、この夏を終えた今、私は水泳部に携わった全ての方々に、そしてすべての部員に感謝しなくてはと思いました。当たり前のことが、当たり前でなくなった今の時世。すべての事、

人々に感謝しながら、残された部員たちには、一回の練習、日々を大切に過ごして成長してほしいと願うばかりです。

「時間は有限、可能性は無限」きついことを楽しく。

水泳部はこれからも前を向いて進んでいきます。

一游会の皆様もこんな時だからこそ、前向きにお過ごしください。そして時々、一瞬でいいので九段の水泳部のことを思い出し、これまでと変わらぬご支援とサポートをお願い致します。



観海亭亭長挨拶

しのぎ
まさひろ
篠崎 雅大

今年度の観海亭亭長を務めました、九段中等八回生（卒業四年目）硬式野球部OBの篠崎雅大と申します。一游会の皆さまにはこの場を借りてご挨拶をさせていただきます。今年度もたくさんのご支援、ご協力、誠にありがとうございました。

今年度の至大荘行事は新型コロナウイルスへの感染リスクを避けるため、中止となりました。大変残念なことではございますが、世間の今の状況を考慮すると仕方のないことであると思います。

今年度の至大荘行事に向けて、毎年のことではありますが、昨年の至大荘行事が終わった直後から準備を始めておりました。昨年度は、ドローンを用いて撮影した大遠泳の映像を反省会にて上映した際には、若手助手とベテラン助手による熱い意見交換や知識の共有などが行われ、翌年の至大荘行事に向けていい雰囲気ですタートを切ることができました。また、普段の泳力練習に関しても、泳力別メニューの作成や水泳部OB OGによる泳法指導など、個人個人が自身の泳力と向き合い、泳力強化に向けてひたむきに練習を続けてまいりました。



しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、プールでの泳力練習や新卒（卒業一年目）助手との交流も困難な状況となってしまいました。そんななか、今我々にできることはなにかと考え、オンラインでの会議や新卒に向けた隊列指導用の動画制作など、いつ練習再開しても大丈夫なように準備を行ってまいりました。結果として、今年度の至大荘行事は中止となってしまいましたが、助手として新たに活動の範囲を広げることができたと思っております。

今年度亭長を務めさせていただいて改めて感じたことは、たくさんの方々の支えによって至大荘行事が成り立っているということです。また、今年度は特に、毎年至大荘行事を何不自由なく行えていたことのありがたみを痛感いたしました。九十年以上もこの行事を続けていくことができたのもひとえに皆さまのご支援のおかげでございます。改めて感謝申し上げます。

移り行く時代の流れとともに、至大荘行事の形も少しずつ変わってきているように感じます。しかし、助手の「生徒のために」という想いは変わらずに私たちの中にあり続けています。百年目、そしてその先へ向けて、現役助手、OB OGの方々、そして先生方と協力しながら、至大荘行事に尽力いたします。今後ともご支援、ご協力いただけますと幸いです。何卒よろしくお願いいたします。